

## フィリピン研修 参加報告書

京都大学文学部 社会学専修4年 鈴木かな

9月11日から18日の1週間、フィリピン・マニラに滞在した。私は2017年春よりおよそ1年半、安里先生の社会学特殊講義の授業をきっかけに京都市内の中学校でJFC（Japanese-Filipino Children、日本とフィリピンにルーツを持つ子どもたち）の学習支援ボランティアをしている。普段関わっている子どもたちのルーツであるフィリピンを様々な角度から自分の目で見て考えることによって、自分自身の理解を深めるとともに、今後の活動のヒントを得たいと考え本プログラムに参加した。

本プログラムの具体的な内容としては、政府機関であるCFO（Commission on Filipinos Overseas、在外フィリピン人委員会）での結婚ビザで日本に来るフィリピン人女性や職員の方々に対するプレゼンテーションやディスカッションをはじめ、NGOや学校、福祉施設などの訪問、日本へのフィリピン人の送り出し・受け入れに関わる様々な方へのインタビューなどがあった。毎日ホテルに帰ってから頭を整理するのに苦勞するほど、朝から晩まで盛り沢山の1週間だったが、ここではその中でも特に印象に残ったことを二点記したい。

一点目は、今まさに成長の途上にあるマニラの街や人々の様子を目の当たりにしたことだ。交通規則がもはや意味をなさない、非常に雑然とした道路状況や高く伸びる建設途中のビルの群れを見たり、フィリピン料理を食べたりして普段接している子どもたちがフィリピンにいたころの様子を今までよりも少し理解できたような気がした。また、制服姿で下校する小学生たちがいる横で金銭を求めて車の窓を叩いてくる子どもたちがおり、格差が大きいと情報として頭ではわかっているが、実際に目の当たりにしたときのインパクトが大きく、車の中にいるこちらの目をじっと見つめてくる子どもの眼差しの鋭さが非常に印象に残っている。

二点目は、興行（Entertainer）ビザでのフィリピン人女性の来日に関わった、さまざまな人たちから話を聞いたことだ。興行ビザとは、スポーツや芸能活動を行うためのビザなのだが、フィリピンバブなどでのホステス行為が問題となり、性的搾取による人身売買だとして国際的に日本が批判を受けて2004年にその運用が厳格化されて以降は、フィリピンからの興行ビザでの来日数はぐっと落ち込んでいる。今回はフィリピン側のエージェント、日本側のプロモーター、そして当事者であるエンターテイナー（タレントとも呼ばれる）であった人たちから詳しく話を聞く機会があった。当たり前と言えば当たり前なのだが、同一の事柄についてであっても、それぞれの立場によって見解の違いや事実の認識が食い違う部分が数多くあった。じっくり話を聞いて整理していくプロセスは複眼的に物事を捉える力を養ういい機会だったと思う。しかしその一方で、元エージェントから彼らがしてきたことを正当化する発言を聞いた際などには、今までに出会ってきた、厳しい状況に置かれてきたであろう元エンターテイナーやJFCを思い浮かべて、胸が詰まるような、腹立たしいような非常に複雑な気持ちになることも度々あった。

ボランティアとして関わる中で、彼らのバックグラウンドについて自分の目で見て考えること抜きに支援することは無責任なように感じつつあったので、その機会を得られたのは本当に有り難かった。今回の研修で見聞きし考えたことを活動にきちんと役立てられるよう、学んだことを整理ししっかり反芻したい。今後も何かしらの形でフィリピンに関わりを持ちたいし、少なくとも興味を持ち続け、考え続けていきたいと強く思った。